

市長と対談

合併後の佐世保く市民協働の幕開け

4月1日、本市は吉井・世知原両町と合併するとともに、ことを「協働の幕開け」の年と位置付け、その第一歩として、「させば市民活動交流プラザ」を開設しました。そこで今回は、市長と地域に密着した活動をしている3人の方に、その活動内容や合併後の新しいまちづくりについて語っていただきました。



光武頭市長

市民協働の理念

市長 まず、どうして市民協働による市政が必要なのかをお話したいと思えます。国にまだ力がなかったころは、高齢者介護なども自助努力で賄っていました。戦後の復興期を経て、国に余裕が出てくると、都市の基盤整備や社会保障制度など公的な措置が充実してきました。ところが、社会のニーズが多様化した現在では、公的機関の支援だけではすべてを賄うことが困難になり、市民が共に助け合う共助が必要となります。現在の社会は、自助、公助、共助を合わせて、成り立っています。

法人の活動などです。市では、このような団体が活動しやすい環境をつくりながら、市民が広く支え合う、市民協働の社会を目指しています。その第一歩として、させば市民活動交流プラザを開設しました。共助の一端を担おうとする市民の方々の活動の自立化、継続化には、人的面や財政基盤面など大変だと聞いておりますので、そうしたところを支援していきたいと考えています。

させばる原始村で自然体験
市長 福田仁さんがさせばる原始村を始める動機は何だったのですか。
福田仁 今の子どもはあまりにも自然に触れる機会が少ないということ、初代村長が始めました。小・中学生を中心に、家庭を離れて、自然



毎年夏に開催される「せちばる原始村」

体験をする2泊3日ほどの自由なキャンプで、こととして19回目になります。子どもはゲーム、漫画本、大人も酒、たばこは禁止です。食事も飯ごうで炊いたご飯と原始鍋(豚汁)だけで、おやつもないのでお腹が減るのでしよう、残飯がほとんど出ません。食器類も竹で作ります。池でボートを浮かべて遊んだり、釣りをしたり、時間の制限もありません。夜は一晩中スタンプが起きていて、火をたいています。大きなけがやけんかをしないように、それだけは注意します。子どもたちが帰るころには、虫も殺さずに逃がそうとするなど、生き物に対する優しい気持ちも芽生えてくるようです。

郷土芸能として根付かせたい

市長 福田省吾さん、吉井町の五蔵太鼓はいつごろから始めたのですか。
福田省吾 20年前の昭和60年に始めました。地元でも郷土芸能的なものをやれないかと思ひ、和太鼓をやってみようということになりました。
市長 五蔵太鼓が、地域の人々から支持を得られたたきっかけは何だったのでしょうか。
福田省吾 十数年前、長崎県地域文化賞をいただいたから、皆さんに認めてもらえようになりました。最初は町おこしのためと行っていましたが、和太鼓ぐらいでは、町おこしはできないと痛感し始めました。わたしたちは、アマチュアなりに、好き

なものはずっと続けているのですが、今後の目標は、本物の伝統芸能をこの地に根付かせることです。そのためには、百年単位で続けていかなければならないと思います。今はその基盤づくりを目指しています。
島瀬町の子どもたちにも教えていたのですが、たまたまことしは、島瀬町がおくんの踊り町となり、11月の佐世保くんちにも出演することになりました。

福祉の勉強のため再度学校へ

市長 小林さん、社会人になつた後再び学校に戻つた理由は何か。
小林 銀行で働いていたとき、高齢者や障害者のお客さまに対応しているうちに、もっと社会福祉を勉強したいと思つたのです。社会福祉学科がある長崎国際大学が開校したのもきっかけとなりました。短大でも福祉を少し勉強したのですが、制度も変わるうとするときだったので、大学では多くのことを学びました。



五蔵太鼓 (合併記念式典)

福田仁さん
せちばる原始村村長。「親子レクリエーション」代表者。総合型地域スポーツクラブ「せちばる文楽体」代表者。レクリエーション、スポーツ活動などを通じて、ボランティアによる青少年教育活動を展開。

福田省吾さん
「五蔵太鼓社中」代表者。町の青年団長在任中、日中友好訪中団「若人の翼」へ参加。西海文化研究会委員も務める。現在、佐世保市社会福祉協議会吉井事務所勤務。五蔵太鼓社中で、市内外のイベントで活躍。

小林教子さん
短大卒業後、市内の銀行に勤務。その後、福祉を学ぶため、長崎国際大学人間社会学部社会福祉学科に入学。卒業後、福祉関係のNPOの活動にかかわり、ことしの4月からさせば市民活動交流プラザの常勤嘱託職員として勤務。



させば市民活動交流プラザ(旧戸尾小学校跡地)